

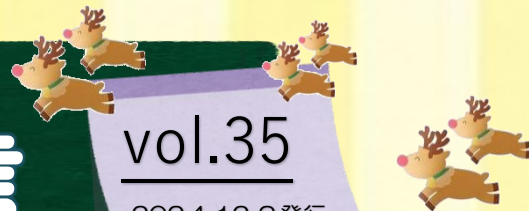


青森市の子育てを応援してます

サポセン通信

vol.35

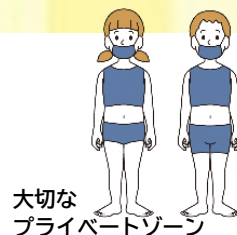
2024.12.3発行



講師：古川久子さん

きらきら塾 6/11 開催

今日からできる おうち性教育



「性教育」を難しいものと捉えずに日常生活の中でさりげなく子どもに伝える方法を学び、性について話しやすい親子関係づくりをテーマに開講しました。講師には、助産師の古川久子さんをお迎えし「今日からできるおうち性教育」と題して講話していただきました。

講話では、日本の性教育は、生殖に関する話が主になっているが、小中学校の授業で性交、避妊、中絶について具体的に教えることは避けられている。フィンランドや韓国では年間 10～15 時間の性教育カリキュラムがあり、日本は年間 3 時間程度で、性教育は遅れていると話されました。

そこで古川さんは、今注目されているのは「包括的性教育」。人権、ジェンダー、健康とウェルビーイング(精神的・社会的・身体的に充実した状態のこと)など八つのコンセプトがあり、性を学ぶことは人間関係の土台になるという考え方を紹介されました。

また、好きな人に嫌われたくないからノーと言えない、子育ては女性がするものという考え方も、包括的性教育の視点で見るとフェアではないです。子どもは、身近な家族を見て育つので、親子で性を学び、普段の生活の中で親が「包括的性教育」を意識することが性教育になるというお話が印象に残りました。

グループトークでは、子どもが性の質問をしてきたときはチャンス！まずは「いい質問だね！」と返すことで、「困ったことがあったら親に聞いていい」と思ってもらうことが大事であること。次に「何で知りたいと思ったの？」と聞くことで、子どもが何に興味を持っているかを明確にでき、子どもが聞いていることには真剣に、科学的に端的に答えることが大事と分かりました。

水着で隠れる場所＋口は「プライベートゾーン」。それだけでなく、自分が大切にしたい「プライベートゾーン」は頭から足の先まで、どこでも自分で決めていい。プライベートゾーンは人によって違っていいということや、子どもが小さいころから境界線（バウンダリー）を意識し、無理やりではなく同意を取って関わる大切であることを事例を挙げて話してくださいました。

最後におうち性教育の基本は「子どもとのコミュニケーションを大切にすること」と話され、生殖のことに限らず、自分や他人を大切にすることにつながる「包括的性教育」を知ることができ、視野が広がりました。今回の講座も、子どもとの関わり方を見直す機会になりました。



青森市子育てサポートセンター

青森市子育てサポートセンターでは、家庭教育に関する学習機会の提供、青森市内の小中学校で行われている家庭教育学級の運営サポート、子育て講座《きらきら塾》や発達に心配のあるお子さんに関する講座《うとう塾》の企画運営、情報収集、発信、また子育ての相談の対応等を行っています。

【TEL・FAX】017-774-6537（開設時以外は、留守番電話をお願いします。）

【E-mail】aomorishi-saposen@arion.ocn.ne.jp

【住所】〒038-0813 青森市松原 1 丁目 6-3

サンピア（勤労青少年ホーム）2F

【開設日時】毎週火曜日 10:00～13:00

【ブログ】<http://blog.goo.ne.jp/saposenrarara>



ブログ QR コード



【プロフィール】臨床心理士・公認心理士。小中学校でスクールカウンセラーをしています。朝ドラに夢中です。



【子どもの発達と親の関わりを考える】と題して、岩田彩子さんにお聞きしました。

【中学生の発達の特徴と親の関わり方を考える】



思春期のころは忙しい。中学生になった途端、大人へのカウントダウンが急に始まる気がしませんか。受験というラスボスを意識するせいかもしれません。自分の将来をリアルに考える場面が多くなるからです。でも、自分が何をしたいかがわからず、焦りや不安を覚えます。また、自立も求められます。それは自分で考え自分で決めていくことですが現実的には大人の助けが必要で、その矛盾に居心地の悪さを感じ反発も少なくない時期です。周囲の反応にも敏感になり、自分がどう見られているのかということに関心も高くなります。

ところで、映画「耳をすませば」を知っていますか。本好きの中学生の少女、雫が進路を考えているところに、バイオリンづくりの職人を目指す少年があらわれます。少年は自分にその見込みがあることを親に証明するためにこれから修業に行くというのです。少年の夢に突き進む姿に惹かれた雫は、自分も何かを見つけようと模索し、物語を

書くことに挑戦します。しかし、納得のいく仕上がりにならず、雫は自分の未熟さを痛感します。落ち込んでいる雫に「はじめから完璧なんか期待しちゃいけない」「何かを作ることは、自分の中の原石をゆっくりと時間をかけて磨いていくことだ」と教えてくれた人がいたおかげで、雫はもっと良いものを書くために高校に行って勉強をがんばろう、自分の原石を磨く決意を新たにするという話です。

人と自分を比べて落ち込む、自分の能力のなさに落ち込む、周りが自分よりも秀でているように見える、周りに置いていかれるような焦りや不安と中学生のあるあるが詰まっています。子どもに何を聞いても「特になにもない」「普通」ばかりで、何を考えているのかわからず、親は心配になることもあります。親の想像以上に子どもは自分のことを考えていることを改めて感じさせられます。お子さんが自分の原石をじっくり磨いていけるように、保護者のみなさんも根気強く応援しましょう。



講師：土崎純子さん



うとう塾講座 9/12 開催



うちの子、学習障害？と思ったら



うちの子が学習障害？と思ったら、親はどんなことができるのかを青森市教育委員会指導課教育支援室の土崎純子さんを講師に迎え、講座を開催しました。

LD(学習障害)とは、基本的に全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態を指します。

学習に困り感を持っている子どもたちは、これまでSOSを出してもうまく受け止められなかったことにより、自己肯定感を喪失していることが多いため、まず子どもたちの話に耳を傾け、子どもを理解することから始めることが必要です。子どもたちを理解するためには、直接観察の他に[※]スクリーニング検査や課題の誤り分析等を行っていきます。

読み書きのつまずきは読み書き障害（ディスレクシア）、書字障害（ディスグラフィア）、ADHD（多動・衝動・不注意）に分かれ、それぞれ混在しています。

読み書き障害の場合、音の聞き取り、目での理解、記憶などといった原因でうまく読めないのか、書けないのかを把握したうえで具体的な支援につないでいく

必要があります。形の似ている「ぬ」と「め」を間違えたり、文字や行を飛ばしたり、単語や文末を読み間違えたりする子どもは、情報処理機能の一部が未発達なため、見た文字をことばに変えるといった変換作業がスムーズに行えていません。そのため、絵から文字をイメージするキーワード法やICTを積極的に活用し支援していきます。

書くことにつまずきがある子どもの場合、情報処理や認知の過程に不具合があり、手と目の動きを強調させるといったことがスムーズに行えていません。支援として体幹を安定させるための運動やビジョントレーニングを取り入れていくこと等が紹介されました。

【「自然と学ぶ」「がんばればできる」「失敗すれば気づく」が通用しない生徒はいます。でも「分かるように伝えれば、分かる」「その子に合った方法なら、できる」と実感しています。「こちらが」できることは、たくさんあります。】というお話が心に残りました。

※スクリーニング検査とは

ふるい分けや選別、選抜などの意味を持ち、潜在している疾患や健康問題を見つけ出すプロセスを指します。